
世界の崩壊

伎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の崩壊

【Nコード】

N7771M

【作者名】

伎

【あらすじ】

普通の、普段の、日常。

その中に潜むのは現実ではない現実。
有り得ないはずのお伽話。

．．．嘘の様な真実の物語。

世界は、ゆっくりと静かに崩壊している。

1 世界崩壊の兆し（前書き）

SFで冒険で恋愛。そんな話です。

1・世界崩壊の兆し

きつとそれは、何百年も前からあったこと。

世界は、ゆつくりと崩壊している。

俺がその事実を知ったのは小6のゴールデンウィークだった。

5月5日午後5時55分。その一分間だけ世界は真実の姿を見せる。小6という、幻想や夢、有り得ないことは信じない年頃だった俺は見えた景色も幻覚か何かだと思っていた。でも、そのとき見た景色は茶色くて、寂れていて、なんだか見ているだけで悲しくて、人恋しくなった俺は友達に電話をかけた。でも、何時まで経ってもコール音が続くばかりで友達は出ない。諦めて切ろうとした矢先、突然ピツという音がすると受話器の向こうから声が聞こえた。

「もしもし？ もしもーし… 誰か居るなら出てください… 居ますか？ もしもーし…」

出ないで置こうと思ったのより体が先に動いて、俺は受話器を取った。

「…何方ですか？」

取った以上は何かしら言わないとという思いに駆られた俺は、受話器の向こうの知らない人に話しかけてしまった。

「あ、、出てくれて有難うございます。あの、今世界は見えていますか？」

唐突な、意味の分からない質問。

“世界はいつでも見えていますよ” そう言おうとした俺は、今見ている景色が普段と違うことを思い出した。

「今はちよつと違うけれど、何時もならもつと綺麗な世界が見えます」

その当時少々ませた餓鬼だった俺は、随分気取ったことを言っただけな記憶がある。

だから多分そんな様子を言っただろう。

「そうですね。あの、覚えておいて欲しいんです。きっと、もう少ししたら分かる筈だから。私の名前は田幡映見。歳は13。何時か、何時か助けに来てください。そしてまた、来年のゴールデンウィーク、5月5日午後5時55分に電話をして下さい。待ってます」

その言葉を最後に、その電話は切れた。

電話が切れたと同時に、外の景色はいつもの、普通の景色に戻った。

何故、こんなにも明瞭に記憶しているのかは分からない。

でも俺はその記憶通り、毎年毎年5月5日午後5時55分に電話を掛けた。そして景色の変わっている1分間だけ田幡映見と会話をする。その内に、この世界に何が起こっていて、これから何が起ころうとしているのかを田幡の話から理解していった。

世界は、ゆっくりと崩壊している。

田幡映見はその” 真実の世界” の唯一の住人で、こっちの” 偽物の世界” と繋がるのはゴールデンウィーク中のみ。そして電話するのに一番電波がよくて一番長く話せる確率が高いのがこの1分間。そしてどうやら、この世界で見ている景色は偽物で、田幡の世界が本物らしい。元々は1つの世界だったはずがどうして、バラバラになっているのか、そして何故世界は崩壊しようとしているのかは分からないんだそうだ。

阿呆らしいと思うだろう？

馬鹿だと思いかもしれない。

“ そんなお伽噺、今時流行らないよ” と言われたこともある。

それでも事実を目の前に突きつけられた俺は田幡の言葉を信じるしか無かった。

田幡と話している時だけ、本当にその時だけ、いつもの景色ではない景色が見える。

それは俺にとって事実以外の何物でも無く、説明の付けられない現象だったのだから。

「こうやって、話している時間にも世界は崩壊していくの」

「お願い、助けて」

「もう、壊れてしまいそうなの。限界なのよ」

世界が絶望を味わうのもそう遠くない

2・絶望は日常に

嫌いだった。この世界も、人間も。

自分を取り巻く環境に嫌気が差したのは何時のことだったか。

今思えば、あんなお伽噺を自分でも驚く程抵抗なく信じてしまったのは、俺自身が望んでいたことだったからなのかもしれない。

「…これが、最後よ」

俺が17才になった年。電話で開口一番に彼女は言った。

「は？…どういうことだよ」

意味が分からない。

いや、分かりたくない。

「もう、終わりよ。此方の世界はもうすぐ無くなる」

疲れた様な、溜息混じりの諦めきつた声。

それでもその声には否応なく俺に現実を分かせようとする響きがあった。

「…嘘だろ」

今まで支えにしてきたものが、こんなにも簡単に自分の手の届かないところで崩れていく。

「嘘じゃないわ。だからもう、来年はこの電話で貴方と話すことが出来ないの」

さつ、と自分の顔から血の気が引くのが分かった。

田幡は、誰にも見届けられず助かる見込みも無く、ただ一人で死ぬのを待つだけの日々を甘んじて受けるつもりなのだ。

「絶対にか」

如何しても確かめたくて、分かっていることを聞いてしまう。

…それが自分を追い詰めることになるとも知らずに。

「絶対によ。もう、助からない。助けて欲しくても誰もいないし、世界の崩壊は止まらない」

その言葉を聞いて気がついた。

「じゃあ、俺等の世界はどうなるんだよ？」

田幡が向こうで溜息を吐くのが分かった。

ただと言ってしまった言葉はもう戻らない。

何時かは知らなきゃいけない、真実。

それならば、今。

「分からない。だけど…此方の” 真実の世界” が無くなっても” 偽物の世界” が残ってるなんてことは考えにくいわ」

死ぬんだと、思った。

それでも俺は何故だか冷静だった。
否、心が冷め切っていた。

俺はこんな真実、知りたくなかったと今更思う。
田幡も、俺も、世界が崩壊するという事実を、一人で抱えて死ななければならぬ。

真実を、真実なのに他人に言えないまま…

なあ、もしも神様が此の世にいるならば、俺たちに与えた運命は酷すぎやしないか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7771m/>

世界の崩壊

2010年10月8日21時32分発行